

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

e-mail: shaketsushin@city.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポルビル九〇四 電話(03)3377-4649 FAX(03)3299-5367

振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額700円 6ヵ月前納制

〈もくじ〉

■巻頭言■

一千号とこれから

後退の三十年から前進の時代へ
千号のお祝いとはくの人権学習
国労「修善寺大会」

歴史の重みを刻み、末永く
君が代・日の丸

歴史に輝く

「労働者学校」の貴重な会報

地方からの挑戦―勝った！―

地域で仲間とともに

一歩譲れば更にまた

焦った地区労大会の「おまけ」

「資本論」と「現代資本主義」

千五百号めざす新たなスタート

一千号祝して(千と三十年に因みし俳句、川柳)

ドキドキ、ヒヤヒヤ

一千号達成万歳！

全国の仲間を結ぶ絆

みんなの知的財産

いま想うこと

読者からのおたより……………19

編集部だより……………

……………20

滝野 忠……………2

原野人……………3

稲村 竜……………4

稲村 守……………5

三浦 輝雄……………5

長谷川 菊雄……………6

木村 哲蔵……………7

花井 吉宅……………8

赤峰 正俊……………9

有泉 五郎……………10

村崎 雄三……………10

藤原 了……………11

鈴木 賢二……………12

小林 久美子……………13

松井 勉……………14

清野 隆……………14

小山 一郎……………15

新藤 薫清……………16

小林 晃……………17

濱崎 忠晃……………18

刊 旬 社 社 会 会 通 通 信 信

NO. 1000 二〇〇七年五月二・三日合併号

二〇〇七年五月二日発行
(毎月一日・二日・三日三回発行)

五月十一・二十一日号で『社会通信』は一千号となった。発刊は一九七七年十一月一日である。三十年、一千号の歴史は労働運動、社会主義運動の後退の歴史であった。

『社会通信』は反合理化闘争の高まりを危惧した財界の総評・社会党攻撃で産声を上げた。攻撃は反合理化闘争否定から、総資本が総力をあげた「総評・社会党」ブロック解体攻撃となった。国鉄分割民営化から労働戦線再編、そして政界再編である。

『通信』発刊から十年は毎日が嵐だった。ソ連・東欧社会主義国家群の崩壊は一九九〇年前後である。苦難は増した。労戦再編成と政界再編成は左派勢力の分断となり、「平和の砦」を小さくした。憲法九条改悪勢力の胎頭改憲策動である。

現代はどんな時代であるか。まず世界市場が資本主義に再包摂された。いわゆるグローバルイズムである。この結果、世界市場は急激にふくらんだ。旧ソ連・東欧、非同盟諸国が市場となった。

つぎに、安価な労働力が独占資本の価値増殖を飛躍的に高めた。中国、インド他の労働者と先進国労働者が競争させられ、賃金は下がった。中国、インドのすさまじい経済成長でハネ上がった油、鉄鋼石、石炭価格を吸収し、まだおつりがくるまでにある。

さらに、ME・ITに主導された技術革新が労働を単純化し、生産価格を引き下げ方向に強力に作用した。最新技術が世界中を駆けめぐる。大企業間の競争は激しくなり、合併・集中、連携はすすむ。最新技術は安い労働力の国での生産拡大を促進し、世界競争は激しさを増す。

このうえに、ME・IT技術は金融資本の回転率をすさまじく大きくした。投機家グループ（ファンド）資金があらゆる証券、商品、金融市場で最大利潤をめざし競争する。もっとも手っ取り早い儲けの手段が、会社の買収となった。ファンドを裏で支援するのが巨大金融資本である。

こうして、世界大競争はかつての帝国主義時代と同じように、資源戦争をもたらすまでになった。ムキダシの搾取と政治反動である。

一号後、「通信」はどこに重点をおくか。

まず、現代の社会の仕組み、資本主義経済の批判に全力をつくしたい。財界は平気で資本は貨殖を求めるものというまでに増長した。資本主義の矛盾はすでにあふれかえっている。矛盾の本質である。とりわけ格差についてだ。

つぎに、生産性向上、資本主義的合理化とはなにか。これらは労働者にどんな影響を与えるかを、これまた根本から明らかにしたい。生産性向上運動、「生産性三原則」の批判である。

さらに、今なぜ憲法改悪かである。総保守は結党以来、憲法にある前文、九条廃棄を政綱とした。「平和の砦」がなくなった今、彼らは改悪に邁進する。ここでは国家について、権力、軍隊である。

(瀧野 忠)

後退の三十年から前進の時代へ

歴史はいくつもの偏曲点をもつ。後退を余儀なくされた反動期にも、人人の活動は次の前進の時代を準備する。日本社会党が崩壊した直接の原因は、自民党によって首相に祭り上げられた村山富市委員長が、平和戦略研究会の矢田部理代表、山口哲夫事務局長等の意見を聞きいれずに、自民党や幹部官僚に誘導されるままに、「自衛隊合憲、日米安保条約堅持」に転じたことであつた。

そこに到つたのは、小沢一郎氏に取り込まれた山花貞夫委員長等が、民間政治臨調など政・官・財・労・報に誘導されて、「小選挙区制賛成」に転じ、細川内閣に入閣してこれを推進する大臣になつたことが主因であつた。

だがそこまで変質していった根本原因は、党内の民主主義が破壊されたことにある。三池闘争が糧となつて、国労をはじめ、多くの労組に地方に活動家が育ち、社会党員が増えていった。社会党大会を構成する代議員は、左派の活動家党員が増え、大会をリードするほどになつた。右派や財界が危機感を持ったのは当然である。山岸章全電通委員長を先頭に、社会主義協会に対する攻撃は熾烈を極めた。資本主義的合理化にあくまでも反対し、科学的社会主義をめざす協会員は、悪者に仕立て上げられ、強い規制が加えられるところとなつた。議員には露骨な選別支持で縛りがかけられた。

党大会代議員から地方活動家党員が極力排除されるようにと、規約が改悪された。国会議員は全員が無条件に代議員になり、これが「代議員総数の三分の一」となる「基準」とされた。かつては国会議員を含めすべての党員から、五百人〜千人の代議員が民主的に選出されていた。ところがこの規約改悪によつて、例えば国会議員が百人であれば、代議員総数は三百人とされ、二百人の中には各県本部代表も、全電通等の支持団体代議員も含まれることとなつた。大会等への党員の権利をこのように差別した規約をもつ社会主義政党は、世界にも例がない。かくも珍奇にして前代未聞な規約によつて、旧社会党の民主主義は決定的に破壊され、崩壊への道を歩み始めた。かくして昨日まで「改憲への小選挙区制絶対反対」、「自衛隊違憲、安保解消」と訴えてきた基本政策を、委員長等が全国の多数党員の声を無視して、入閣と引き換えに代議士会や両院議員総会で多数派を形成しながら、容易に転換できたのである。

「社会主義国家の三原則」（本誌982号参照）に示されるように、社会主義を建設する上でも、「原始的民主主義」にも似た根本的な民主主義が不可欠であるが、本物の社会主義政党を建設する上でも、根本的な民主主義は不可欠なのである。

三十余年の苦闘の教訓を生かし、後退を転じて歴史を前に進める主体を創るために、いま多くの仲間が戦っている。戦争への道を阻止するために、心ある人人が「9条ネット」を立ち上げ、共同戦線の要となる苗木を大きく育てようと、参議院選挙も全力をあげて戦っている。新自由主義の装いをとつた資本主義の矛盾は今や隠しようもなく極度に発展し、われわれの前進を促している。

（原野人・東京都多摩市）

千号のお祝いとぼくの人権学習

滝野さん『社会通信』千号おめでとうございます。ぼくがまだ小学生で学校でいろいろたいへんなとき、滝野さんのおじさんやおばさんが大津まで来てくれて、お世話になりました。おばさんにはバトミントンをしてもらったり、庭に植えていたヘチマをおくらせてもらって感想の手紙をもらったり、うれしかったです。

今は中学三年生になってバレーボール部にはいり、毎日しんどいけど練習しています。練習試合なんかでも、たまに勝てるようになりました。学科は理科や技術が得意で、数学が好きです。千号のお祝いに、「人権学習を終えて」という作文を書いたので読んでみてください。

今回、人権学習をしているいろいろなことが、分かりました。はじめは、人権とは人々が幸せに生きる権利で、今の日本社会には、いろいろな人権侵害や差別がある、と言われてもあまり分かりませんでした。しかし、今回の人権学習を通して、差別を受けている人達や人権侵害をされている人達などのことがよく分かりました。そして、今回自分が調べた在日コリアンも、人権を侵害されていて差別を受けているんだなあということが分かりました。

はじめは、一九一〇年に日本は朝鮮半島を植民地にしたり、朝鮮人を強制的・半強制的に日本に暮らすようにした、など歴史から調べて、その後には、在日コリアンの写真や差別をなくしてほしいなどと書いた、寄せ書きなどを見て本当にこんな人達がいるのか、と思いました。そして、もっといろいろなことを、学習していくと、差別のせいで、職をうしなったり、などいろいろなことでくるしんでいることが分かりました。でも、今回学習したおかげで、在日コリアンを下に見たり、差別をしたり、しなくてすむと、思います。

今回は違う人が調べたことも、聞きました。そこで、一番心に残ったのが障害者についてでした。現在、健常者と、障害者の二つに分けるということは、知りませんでした。けどこれは、障害のある人やその家族の人などからすると、よいものでは、ないだろうなあ、など、思いました。また、六世紀以前には、障害者を抹殺したり、遺棄したりなどが起きていたなんて、思いませんでした。しかし、六世紀には、抹殺や、遺棄がなくなりました。なぜなら、この時代に仏教が伝わったり、むだに人を殺したりなどは、しないようなおしえがあったからです。でも、仏教が伝わって、障害のある人を殺さないというのは、変だなと思いました。でもそれは、仏教がしんとうした今の考えなので当時では、罪悪感などがなかったんだと思います。でも今、現在では障害者のことを考えたりする人達もいるのでよかったと思います。

今回、人権について、学習して今後に生かせると思ったのでよかったです。
おじさんやおばさんも二千号までがんばってください。

(滋賀県大津市・中学三年 稲村 竜)

国労「修善寺大会」

『社会通信』千号の最大のドラマは国労修善寺大会だと思いますが、一九八六年一〇月九〜一〇日の大会開催を当時の国労本部委員長に約束させたのが、その年の九月二四日から二五日未明までの小島忠夫さんなどが率いた国労青年部のデモ行進の流れからの東京駅・八重洲口の国労会館（当時）への決起でした。現場の国労組合員は国鉄分割民営化に反対し、収容所・「人活センター」の人権無視に抗して、総決起していると『社会通信』は伝えました。

そのとき、国労は臨時全国大会を開き、左派が執行部を担い分割民営化反対闘争を闘いぬくという同志の報告を、「そんなことは（数的に、力量的にも）出来もしないし、すべきでない」などというある青年団体の幹部がいて、徹夜で大論争した記憶もあります。その（修善寺大会）おかげで、それが皮切りになり、大きくは社会党・総評ブロックは崩壊させられても、しんどいが決して完全に「やられっ放しではない」情勢が二〇年続いている（全労協・新社会党・鉄建公団訴訟原告団そして社会主義キューバの存在）と思います。今もその意味では『社会通信』の面目躍如たるところです。貧乏人の子沢山の我が家、少子高齢化社会に夫婦二人で抗していますが、滝野さんご夫妻にはたいへんお世話になっています。その九・二五に生まれた三男は二十歳で、私が三三年間勤めているローカルセンターが入居している会館のアルバイトに来ています。末っ子四男は作文のような調子です。ぜひいついつまでもお元気で、子どもたちや労働者の未来を切り開く社会通信であってください。ありがとうございます。（稲村 守・滋賀県大津市）

“歴史の重み”を刻み、末永く

私が始めて「社会通信」を手にしたのは、今から三〇年程前、旧ドイツ（DDR）に留学していた頃でした。その頃日本では、「協会規制」（攻撃）があったことを記憶しています。それ以来、三〇年余「社会通信」の発行を続けておられることに驚きと敬意を表したいと思います。

発行人の滝野さんには何かとお世話になりました。地域での講演会や学習会に手弁当で馳せ参じて頂き、随時適切なお話しをされ、苛（いら）つく頭をスッキリ整理させて頂いたような気がしました。中でも国労東京「チューター養成講座」の講師として何かとアドバイスされ、また、「社会通信」に私の拙い文章を何回か載せて頂き、併せてありがとうございます。

思えばこの三〇年余り、私を含めて激変でした。国労への「ヤミ・カラ」攻撃に始まり、私は何も知らないまま旧東ドイツへの留学、ソ連・東欧社会主義国の崩壊、「総評・社会党」解体と同時に、国鉄「民営・分割」＝国労解体攻撃は止むことはありませんでした。

私自身国労組合員として、職場の仲間を信じつつ、攻撃に耐えながら社会主義への

展望と労働運動の発展を見失わず、目の前の取り組みを進めてきました。そこでの支えはなんとと言っても、情勢を掴むことと「学習の力」でした。その意味で「社会通信」は大変私にとって勉強になったことです。

今私は、国労組合員であるがゆえに二〇年近く本務職場をはずされ、二年程前によくやく元職場（駅職場）に戻されましたが、職場の雰囲気や仕事内容ではこのブランドでかなりこたえました。今ようやくおちつきを取り戻してきたように思います。

最近私は、映画や美術展、博物館などに以前にも増して足を運ぶようにしています。生意気なようですが、「過去を忘れず、歴史を振り返り、この先どう生き抜くか」などと考えています。自己を見つめるためにも、別の角度から触れるとも精神衛生上よきことのような気がします。

以上、私の近況を含めて『社会通信』一千号への寄稿といたします。これからも「歴史の重み」を刻み、末永く続けられますよう期待いたします。

（三浦 輝雄・東京都杉並区）

君が代・日の丸

私は、この問題について、「この国のゆくえ」梅田正己著（社会通信で薦めた本です）と「新しい歴史教科書」扶桑社、また、朝日新聞の声を資料としました。

今年、天皇、皇后が、テロ対策特措法やイラク人道復興支援特措法に基づいて海外派遣された自衛隊員に皇居で会ったという記事がありました。海外派遣には、国論を二分する激しい意見の対立があり、今も続いていると思います。これを天皇が「国際的な協力に参加し、力をつくしてこられたことを誠に苦勞に思います。」と自衛隊員をねぎらった。結果的に自衛隊の海外派遣に加担したことになった。憲法一条で、「国民統合の象徴」と規定される天皇の地位を考えると憲法の精神からかけはなれていると思います。

教育現場での日の丸・君が代問題は、一九八五年の文部省による各都道府県ごとの実施率公表から始まった。一九九〇年春の卒業式、入学式で教師たちは、思想と良心がかつとうしました。この年から、文部省の定める学習指導要領の規定が改定され、日の丸掲揚・君が代斉唱が義務づけられたからです。

戦後の日本の教育は、戦前の教育の否定から出発した。戦前の教育の本質は何か。天皇制国家主義による権力統制だった。教育の最大の目的は、天皇を神としてあがめ、国家のために進んで身を投げ出す子供たちをつくることだったのです。当時の子どもたちは、大きくなったら、「兵隊さん」になるものと信じ込んでいました。

私の父は、八〇歳です。同窓生は戦争にかりだされました。子供の夏の宿題で太平洋戦争をテーマにした宿題を共に勉強しました。戦争を体験した人に話しを聞きにいったところ、神社に亡くなった人の慰霊碑があると話されたので見に行きました。戊辰戦争から亡くなった人の名まえが、刻んでありました。支那事変（日中戦争）の戦

死者がもつとも多く刻まれていました。国家権力による思想・学問の統制、言論統制、教育の統制など、全体主義でした。教育者の中には、教科書から離れ、子供たちに自分たちの生活の現実を見つめさせようとした教師たちは、刑務所に入れられた時代でした。

戦後の憲法は、国による権力統制の撤廃は、憲法一条で「国民統合の象徴」と天皇の地位が規定されました。また、民主化の大きな柱となったのは「思想・良心の自由」、「言論・表現の自由」、「学問の自由」がうたわれました。

私は新しい歴史教科書を読んでみました。日本の神話が多くとりあげられてあります。日の丸については、明治三年明治政府が日の丸を国旗として布告したと書いています。また「君が代」の君は天皇を指していると書いてあります。江戸時代から明治になり、天皇制になってから作り上げた「日の丸」、「君が代」が、一九九九年に国旗国歌法が成立し、法律に明文化されました。太平洋戦争のことを、大東亜戦争と書いてありますが私は、大東亜とは初めて知りました。特攻隊員の遺書の中に、「かたきをうってやるから」、「国家のあんきにおもむかんとす」などをのせています。私は、この教科書は教育現場ではふさわしくない本だと思えます。

私は、戦前にもどってきているように思います。安倍政権の発足で一気に表面化したと思います。教育基本法の改「正」であり、憲法改「正」国民投票法案であると思います。映画の「きけわだつみの声」を見たとき戦争の悲惨さむごさを感じました。恒久平和を理念とする現行憲法を共にまもっていきましよう。

(長谷川 菊雄・埼玉県菖蒲町)

歴史に輝く

現代史の真実を書き続けた『社会通信』が三〇年間で、一〇〇〇号に滝野さん家族と事務局の方々の情熱に、心から敬意を表します

私の「社会通信」保存のは、一九九〇年一月一日のNo.453からです

『社会通信』の歴史の半分に過ぎませんが、今調べてみたら私の掲載文が二五回、「読者からのたより」には四三回掲載されていました

社会主義読者の会の方からは

一糸の流れも、身を寄せ合えば滝になり、大河にもなる

「社会通信」の益々の発展を心から祈念する(佐久間 誠さん)

社会党について

社会民主主義の内容を捨て

自衛隊合憲・日米安保堅持の

保守党に成り果ててしまった(原 野人さん)

社会主義について

マルクスが我々のところに帰ってくるよ

世界では、帰ってきたマルクスに取り組みはじめているよ（滝野 忠さん）

現状、認識、対策については

（現状） 労働組合が労働者の不満を結集する機能を失えば

社会的な不満が充満、思わぬ方向に噴出する可能性を高める

仲間からの手紙には「あらゆる組織は、憲法を無視している」と

（認識） 仲間学んだ忘れられない言葉

「過去を忘れるなら、将来が崩壊する」

『安保』も『三池』も最初は『重かった』が

今では、歴史に輝く偉大な闘争だ

（対策） 労働者を恫喝する幹部に

「誰から、飯を食わして貰っていると思ってるんだ

こんな執行部や労働組合はいらん」と、不満が噴き出している

「労働組合こそ

立て直し（ペレストロイカ）が必要だと痛感」

（木村 哲蔵・横浜）

「労働者学校」の貴重な会報

人は、いつでもどこで、何をどのように学ぶのだろうか。

より狭義には、労働者階級はそのような人間的・労働者的な学びをするのであろうか。

この学びの最も力強い、根源的なものは、「生活的な直接体験」で、差別・抑圧・戦争の階級社会にあつては、労働者人民は忍耐と痛苦を余儀なくされつつ学びつづける。

もう一つは「間接体験」で、その一つとして、購読する雑誌や、贈（送）られてくる会報・会誌がある。私のもとに届くそのようなミニコミ紙誌のほとんどはそのような「運動広報」・広義の階級闘争の情報・学習モノといつてよく、『旬刊社会通信』は、それを三〇年以上の長きにわたって持続させてきた。私がギネス的快挙と名付ける所以である。

一般に、市販されている良心的な雑誌は、リベラルデモクラシーの色調で、当代の一〜二流の学者・論客・活動家を登場させて、広義の知的啓蒙をしており、市民・労働者はそこでもいくらかは大切な学びをしている。

ところが前世紀末になると、階級（闘争）的な学びの場が激減していった。実際の

場Ⅱ労働組合、〇〇学校においても、雑誌・会報においても。

そんな中であって、月に三回、倦まず弛まず、一千号に及ぶまでその階級的な学び・励ましの場を提供してきたのだ。「貴重な会報」という所以だ。とりわけ、二〇年もの痛苦を余儀なくされた「闘争団」にとっては励ましになったであろうことは、いうまでもないことだ。

(花井 吉宅・茨城県常総市)

地方からの挑戦―勝った！

大分県豊後大野市で、四四歳の市職員が職を辞して統一地方選挙に立候補する決意を固めたのは、〇六年一二月のことでした。彼自身が書記長を務める市職労(自治労)が、蜂の巣をつついた様は容易に想像できました。候補者擁立を決定するための臨時大会では、代議員数一四二名中、執行部(案)に賛成する者七七名、反対する者六五名という僅差の決定でした。それから、実質三ヶ月という短期決戦を彼らは闘いました。組織の立て直し、戦術を組み立て、障害を乗り越えて迎えた四月八日。九九一票という大量得票を獲得し勝利しました。

これまでこの選挙区では、七五年の社会党公認候補が議席獲得したのを最後に、今日まで三二年間に四人の「独自候補」を擁立してことごとく惜敗しました。後は「不戦敗」を余儀なくされ、今や保守候補に相乗りし、独自候補の擁立を事実上断念してきたのです。

九九年の選挙では、これまで私たちが対立してきた自民党を離党し立候補した候補と「連合」が政策協定を結び「推薦」決定し、連合主導で選挙協力体制が作られました。その元自民党候補は民主党へと鞍替えしトップで議席を獲得しました。

その議員の政治活動については、「国歌国旗法」の制定に賛成するばかりか、「教育基本法や憲法は時代に合わせて変えるべき」と主張するなど、彼らの運動に反するものでした。また日常的に組合員や有権者の声に耳を傾け、議会活動の報告会を開くことなど皆無でした。そのような議員を労働組合が、二度(〇三年もトップ当選)も推薦してきたことが、労働者から政治を遠ざけ権利意識を奪い去ったといえます。

労働界と政界の離合集散によって従来の「総評・社会党のブロック」が崩壊し、「連合・民主党ブロック」という「鶴(又エ)」のような組織が産み出されました。

この二〇年間に「三公社五現業」は民営化され、地方自治体は「合併」させられ「教育基本法」は改悪され「国民投票法案」は強行採決されるなど、政府自民党(公明党)は、公務員労働者を徹底的に叩く一方で、加速度的に「憲法改悪」につながる流れに国民を巻き込み、彼らは後退に次ぐ後退を強いられてきました。

今や労働運動や政治闘争は、企業や権力政党といかに「共存できるか」という姿に変質してしまいました。彼らは、権利放棄と敗北主義の環境に閉じ込められ、時代に責任を持つことを放棄させられてしまったのです。

今回、そうした矛盾と向き合い、組合や政党幹部と激しく対立してまで選挙を闘うことに多くの労働者が危惧や恐怖を抱いたことは、ある意味で当然のことでした。

しかし、彼らは地方の一議席を苦しみながらも、しっかりと勝ち取ったのです。「玉砕選挙」・「組織分裂」・「泡沫候補」と揶揄された挑戦：ほとんどのマスコミからは、最後まで「現職二名」と泡沫視された闘いでした。

闘わずして負けることに慣らされてきた彼らは、労働者や有権者の「選択権」を行使し闘うことの厳しさと勝ち取る喜びを知ると同時に、闘わなければ何一つ得られない事実を学びました。あらゆる偽りに疲弊しきった人々も、真実に触れれば時代の扉を自ら開くことができることを証明した卯月の一日でした。

【投票結果】（二名区）

投票者数 革新独自候補（新人） 民主党候補（現・2） 自民党候補（現・1）
二七、〇九二 ☆九、九一七 ★五、九三一 ☆一一、二四四

当選直後に民主党・社民党をはじめ県下労働団体の幹部から祝電が届き、また祝勝会に訪れ祝辞を述べる彼らの変わり身の早さにはあきれざるばかりです：

（赤峰 正俊・大分豊後大野市）

地域で仲間とともに

長きにわたるたゆみないご努力ご苦労の上での偉大なる一千号達成に敬意を表します。常に受信者でしかなかった私たちは、貴重な情報と指針などの提供を受け、様々な元気をいただきました。三〇年間一千号発信の節目に、改めて、発信者のご苦労に思いを寄せつつ、大いなる感謝と敬意を申し述べます。

記念号への寄稿を要請されましたが、運動の前線に身を置かない自分としては、おこがましくて真の思いはつたえられませんが、お許し下さい。いま年金生活者多数の、八人の仲間たちで月一回の地域交流をやっています。その機会には、常に、通信で得た最新情報を有効に活用させていただいています。これからも、的確な情勢分析、時の課題、針路など元気な情報提供を期待しています。ますますのご活躍と貴誌の充実発展を祈念申し上げます。

機会ありましたら、当地にも足をお運び下さい。（有水 五郎・鹿児島県鹿屋市）

一歩譲れば更にまた

社会通信との出会いは、二五年ほど前、中野区で「出退勤時間改善」と「ネームプレート着用」攻撃があったときです。

「出退勤時間改善」については、当時八時四五分→一七時であったものを八時四五分→一七時一五分に。「ネームプレート」については、全員に配布・着用しようというものでした。

労組の青年婦人部では、当時はやっていたTV番組「クイズ一〇〇人に聞きました」

を模倣して、「青年婦人組合員一〇〇人に聞きました」という題でアンケートをとり、その結果を冊子化し職場討議に入るという取組みを行いました。

この冊子を手にしたある方が、社会通信に一ページにわたったレポートを掲載して下さったのがきっかけでした。

労組の反対闘争の結果、「出退勤時間改悪」提案は撤回され、「ネームプレート」は全員に配布されたものの、強制はしない、業務によっては不着用や別形式有り、などの条件で妥結しましたが、組合がネームプレートを回収・保管するという戦術をとり、多くの組合員がこれに応じ、組合の強さを感じました。

ちなみにこのネームプレートは、前後して、区議会でも満場一致で採択された「憲法擁護・非核都市宣言」との取引材料であったというのが、もっぱらの噂です。

出退勤時間は現在、八時三〇分→一七時一五分であり、ネームプレートは写真付フルネームに形式が変わった上、着用しない人が皆無（ちなみ小生も胸ポケットに常在）という状況で、隔世の感というか、「一度譲れば更にまた」という労使の力関係の原則を感じさせます。

実は、定期購読を始めたのは、その五年後で、中野の社会党左派グループでかなりの影響力を持っていた、F氏のお勤め（強制？）でしたが、国鉄の分割・民営化攻撃、労戦統一での、社会通信の的確な報道・分析は、「迷える子羊」であった私にとって大いなる指針となりました。

ところであの後、日本社会党の躍進、歴史的敗北、事実上の解党、など激動が続くわけですが、この際に、時には、小生を厳しくつめた、優秀な先輩・仲間が相次いで挫折・居直りし、戦線を離脱・立場変更（自民党入党の人もいる）しましたが、「人間の評価は棺おけに入ってから」という故事は本当ですね。

謙遜ではなく、能力がさしてない小生が、一定の役割を果さざるをえない現実には厳しくつらいものがあります。

ともあれ、社会通信が引き続き私にとって、指針でありますように、ご健闘をお祈りしております。

（村崎 雄三・東京都中野区）

焦った地区労大会の「おまけ」

青い「進路」以来の読者と言えば年が知れてしましますが、赤い「社会通信」に誌名を変更し国鉄闘争を支え続けて一〇〇〇号。旬刊誌だから基本的に月三回発行。よく問題提起が続くものと驚嘆しています。

私は「グリコ森永毒入りチョコ事件」で当時の総評中央が森永製品の販売協力に舵を切ったとき、「森永ヒ素ミルク事件」の総括もなく、よく協力できるものだなとあきれていました。物販の単組ルートは電話を入れて止めました。しかし、地区労ルートから販売協力要請が来てしまったのです。その間、どうせ東京から何かの反論が出るものと待っていたのですが、全く何も出ないまま地区労大会が近づいてきました。仕方がないので、地区労大会で発言するための原稿を自分で書き、地区労大会の代議

員権を共産党員から移譲してもらい、「森永製品の販売協力はできない」と発言しました。

自分の足下に来るまで反論がどこからも出なかったということは全国で困った活動家がたくさんいるに違いないと思い、発言原稿を社会通信社に匿名で送りました。ほどこなく、私の原稿は社会通信に掲載され、どこから割り出したのか現金書留で原稿料が職場に届けられました。私は意図せず「売文」してしまったわけです。以来、滝野さんが原稿に困ると「穴埋め」によく使われました。考えてみれば月三回発行を続けるにはピンチライターが必要です。読者の皆さんも職場や身の回りで起こっていることを一度文字にして社会通信に送ってみて下さい。原稿不足に悩む滝野さんを助けるのはほんのちよっとした文章なのです。一〇〇〇号まで続いた社会通信。これから何号まで続くか楽しみです。(藤原 了・神戸市)

『資本論』と「現代資本主義」

私は以前、私鉄「京成」の労働者であった、その労働組合の機関誌「第六号・一九七四年四月号」に、故・向坂逸郎氏が小論文を寄稿されている、題名は「改良と革命の弁証法」という題である。

この論文は後に『青年と政治』と言う労働大学出版の本に転載されている。論文には学習の重要性や改良闘争の意義について貴重な問題提起をされている。また、この論文には、向坂先生の尊敬する堺利彦の詩が引用されていた。「峠高く冬の日照りて、ひとり行く、旅人の心おのづからおどる」というものである。いかにも革命家の心情を歌っており心に残るものであった。

マルクスは『資本論』で「ここがロドスだ、さあ跳べ！」という文言が、岩波文庫版の(一分冊)二八九頁、「貨幣の資本への転化」の章にある。古典派経済学のスミスやリカードがなし得なかった労働価値説の飛躍を、マルクスの心躍るような宣言として、引用しているのである。

さらにマルクスの、もう一つ印象的な引用は、『資本論』第一巻、二三章四節「資本主義的蓄積の一般的法則」岩波文庫(三分冊)二二二頁の箇所である、「相対的過剰人口または産業予備軍をして、つねに蓄積の大きさおよび精力と均衡を保たせる法則は、ヘファイストスの楔がプロメテウスを岩に釘づけにしたよりもさらに固く、労働者を資本に釘づけにする、それは資本の蓄積に対応する貧困の蓄積をかならず生む。したがって、一極における富の蓄積は、同時に対極における、すなわちそれ自身の生産物を資本として生産する階級の側における貧困、労働苦、奴隷状態、無知、粗暴、道徳的墮落の蓄積である。

資本主義的蓄積のこの敵対的性格は、経済学者たちによって、種々の形で表明されている。もつとも、彼らは、部分的に類似しているが本質的に異なる前資本主義的生産様式の諸現象を、これと混同しているが。」

この表現も非常に印象的である、先の「物神性」といい、この箇所といい、とても

印象に残る引用である。

向坂先生は、いろいろな論文で資本主義社会の分析について、『資本論』第一巻の最後にある、第二章七節の「資本主義的蓄積の歴史的傾向」岩波文庫（三分冊）四一四頁、いわゆる「窮乏化法則」の箇所を引用されていた。私は現代資本主義を考えるとき、この箇所が今日でもびったり当てはまるものと考えている。例えば今日の企業合併などは「資本の集中によって、実現される。つねに一人の資本家が多く、資本家を滅ぼす」・「少数の資本家による多数の資本家の収奪」、またME・IT活用「合理化」についても「科学的意識的技術的応用」「あらゆる生産手段の節約」と。

更にグローバリゼーションについても「世界市場網への世界各国民の組み入れ、および、それとともに資本主義体制の国際的性格が発展する」とあるし、格差社会の問題に付いても「大資本家の数の不断の減少とともに、窮乏、抑圧、隷従、墮落、搾取の度が増大する」とし、一方の極に、資本の過剰、片方の極に貧困の増大などである。すなわち現代資本主義は、この「窮乏化法則」の量的な一層の深まりであると、私は思っている。資本主義社会で暮らしている多くの人は、資本主義的意識の鎖からなかなか抜け出せないのである。

私達労働者は、マルクスや向坂先生にならって、もう一度「学習・反合理化・社会主義」の路線の正しさを再認識し、学習の強化から考えねば成らない時代だと思う。

（鈴木 賢二・東京都葛飾区）

千五百号めざす新たなスタート

三五年前、私が国労の書記になった頃、八重洲の国労会館3階に岩井章さんの事務所「国際労研」に滝野さんがおられ、私たち国労の書記は「岩井事務所は私たちの憩いの場所だ」としよつちゅう出入りをしていました。滝野さんを始め事務局の皆さんは「私たちは皆さんの憩いの場所で働いているんだ」といいながらも、あたたかく招き入れてくださいました。

岩井事務所を中心にして、国労の「資本論」学習会をはじめとした数多くの学習会や会議などがもたれ、昼も夜も国労組合員や官公労・民間の労働者の学習と交流が広がっていきました。そこで得たことは貴重な財産です。

土浦の実家を離れ当時国労会館にあった印刷屋で働いていた嘉津子さんもその一員でしたが、速攻でお二人はロマンスを交わりました。やがて、滝野さんは「進路」から「社会通信」へと活動の場を移しました。そんな、ほとんど忘れかけていたようなことがひとつひとつ思い出されます。

私にとって「社会通信」は、身の回りや、日本、世界で起きていること、労働者の闘いについてなどを「むづかしいことをやさしく、やさしいことを深く、深いことをおもしろく」ときほぐしてくれる手引きで、労働者の学習と交流の場でもあります。体験をしていないことでも自分のことのように考え、理解することは大切なことです。滝野さんが嘉津子さんと長きにわたり、二人三脚で続けてこられたことに対して、

改めて敬意を述べたいと思います。今後とも労働者の闘いの道しるべとして、ますますのご発展をお祈りします。

「社会通信」の今後についてですが、現在の月三回の発行をこれまでの体制で維持するというのは並大抵ではないと、はたからみても思います。この機会に、自らを省みず読者の皆さんにお願いしたいと思うことは、滝野さんも紙上で何度も述べられていることですが、これまで以上に問題意識、闘いの報告、学習の成果などについて読者から発信をしていただきたいということです。読者の拡大も含め、全員参加の精神で千五百号をめざす新たなスタートができれば、と願っています。

(小林 久美子・東京大田区)

一千号祝して(千と三十年に因みし俳句、川柳)

(俳句めく)

ひとむかし三つ重ねて臃かな

山埋めて千本桜の今盛る

千曲川ひと折れごとに霧深み

千秋の氷河解かれて春の水

千羽鶴古び社に若葉風

ひそと付けひそと喰はれし千両の実

千億の先の宇宙や月昇る

(川柳めく)

殿堂入り無くても打ちし一千本

世の中を蚊ほどに刺して三十年

千鳥足で探して居る美し国

千歳飴下げし親子に有る格差

教育を千千に千切って捏ね回し

改憲を千載一遇の好機とて

(松井 勉・愛知県弥富市)

ドキドキ、ヒヤヒヤ

社会通信が一千号になるとは、ただただ本当にご苦勞様です。滝野さんの超人的とも思えるねばり強さと努力には頭が下がります。私が購読を始めたのはかれこれ二五年くらいになりますか？ はじめは先輩の義理で一読者となり、当時の労戦統一(実は総評解体)の動きを勉強するには一番役に立ちました。そうこうしている内に先輩から取り扱いを押し付けられて、いつしかやめられなくなっていました。悔しいのは

国鉄の分割・民営化でJR不採用―清算事業団送り―二度目の解雇―闘争団と変遷している内に仲間が減り、いまでは二部を維持するのに精一杯となってしまっていることです。

私たちのJR採用差別事件の闘いには誌面を大幅に割いて、力をいれてもらっていることは私たちにとって大きな励みになっていきますし、時折私たちの「紋別闘争団通信」の記事を転載してもらっていることで様々な方との交流ができていたこともありがたく思っています。ただ転載されるとよその闘争団の仲間から「言い過ぎだ」とか「ちよつと違うと思うぞ」とか批判やら批評やらをもらうこともあり、載ったあとしばらくはドキドキ・ヒヤヒヤものです。それもまた修行の一つかと最近では達観していますが。

旬刊で一千号を達成することは本当に凄いことです。そして一千号の社会通信が果たした役割もまたその努力と苦勞に比例して大きなものです。もうこうなったら行けるところまで行くしかないのかも。私たちも二一年目とあまりにも長くなってしまったJR採用差別の闘いを、「勝利した」と胸を張って言える（「解決したあと路頭に迷わない解決」と表現する仲間もいます。思いは多分同じです）解決を勝ち取るためにもう一踏ん張りしなければ。まだまだ引退を考えるには早いですよね。

（国労紋別闘争団・清野隆）

一 千 号 達 成 万 歳 ！

「社会通信」一千号達成本当におめでとうございます。

私が初めて滝野さんとお会いしたのは、多分、二〇年くらい前の支部の学習会に来ていただいた時と思います。

ちょうど、週刊新社会の四月一七日号の一面に、統一自治体選挙の結果として、新潟市の小林義昭氏の「ダルマの目入れ」の様子（障がいのある皆さんからは問題との指摘もあるが）とともに、当選を決めた時の選挙事務所の雰囲気がよく伝わってくる記事がありました。私も何回か仲間と一緒に応援にいった甲斐があったと思います。その小林義昭氏から紹介されて、滝野さんから初めての高田まで来ていただいたと記憶しています。

滝野さんからは、これまでに何回となく私どもの支部にきていただき、多くの課題についてご指導をいただきました。また、「社会通信」も一定の部数を講読してきましたが、役員への配付にとどまっておき、今後は読み合わせ討論も含めた学習強化が大きな課題でもあります。

労働運動・社会主義運動の展望を持ってこれたのも「社会通信」のおかげかなとも思います。とりわけ、国鉄闘争からは多くのことを学ばせていただきましたし、本当に「人らしく生きる」ということは、そのように生きたいと思ってもなかなかできないものではないと思います。それぞれの葛藤があったり、諦めが先になったりと、思うように行かないのが人生のようですが、しかし、人間は希望や展望がなかったら生きて

いけない動物ですから、これからも、コツコツとやっけて行こうかと思えます。

そういう私も、「定年」という解雇まで一年を切つてしまいました。これまで永いようでもあり、また、あつという間の「定年」という不安を抱えて迎える解雇の年でもあります。自らの健康を大事に、機械貧乏の農業をしながら、社会変革の任務も肝に銘じて、これからも学習と実践を続けていきたいと思つています。

「社会通信」が引き続き、額に汗して働く人々の羅針盤として、これからも大きな役割を担わなければならない情勢です。滝野さんと「社会通信」の今後ますますのご活躍に期待しています。
(小山 一郎・新潟県上越市)

全国の仲間を結ぶ絆

全国各地の仲間たちを結ぶ『社会通信』が遂に一千号を迎えた。この間、『社会通信』の報告や論文に学び合い励まし合つて、私たち読者も共に激動の時代を生き延びた。

国鉄労働者だった私は、国鉄からの採用通知を受け取つた時、「上司や先輩に従つて無事に勤めれば、退職まで安心して働き続けられるし、戦争で散々苦労してきた両親にも年一回ぐらいは家族割引切符で旅行もさせてあげられる」とのんきに喜んでた。

ところが七〇年代初頭に仕掛けられた「マル生」攻撃で平和な職場は一変した。前日まで冗談を言い合つていた友人が、翌朝には国労を脱退して当局が指示した御用組合に加入する事態が毎日続いた。まさに職場は差別と分断、命令と服従の修羅場と化した。

この攻撃で私はやつと眼が覚めた。国労支部組織や先輩・友人の誘いもあつて学習会に参加するようにもなったし、労働運動や社会主義運動の書籍も読むようになった。それまで所属していた高校野球連盟や社会人野球協会の審判員を辞して、積極的に職場での組合活動に参加するようになった。

その後階級闘争は益々激化し、鎌倉さん、辻さん、灰原さんなどと共に滝野さんには毎月山梨までご足労頂いて、労組の枠を超えた地域の学習会に参加して頂いた。また、『社会通信』を通じて全国の読者との交流も深めることも出来た。こうして、『社会通信』の情報や全国の仲間との交流を糧に、国鉄の分割・民営化反対闘争、労働戦線の右翼再編阻止の闘い、新社会党県本部結成の取り組み、国鉄闘争の勝利解決をめざす闘いなどを闘いつづけてきた。

この間、幾つかの理論誌や機関紙などが激しい情勢の変化に対応出来ず、内部矛盾が生じて編集方針を変えたり、廃刊したりしている。しかし『社会通信』は創刊以来今日まで一貫してその思想と主張を堅持し、労働者に明確な指針を示し続けている。だからこそ、一千号を迎えた『社会通信』のご奮闘に心から感謝すると共に、社会変革を呼びかける為の狼煙を燃やし続けて頂きたい。

労働者の権利が徹底的に破壊され、憲法改悪の危機に直面している現在、労働運動

と社会主義運動の再生・強化が急務だ。だからこそ、『社会通信』の益々の発展を期待する。
(新藤 薫靖・山梨県甲斐市)

みんなの知的財産

反革命によるソ連・東欧の崩壊と社会党・総評ブロックの解体を象徴的な転機として、世界史の流れは、そしてわが国も、反動と右傾化の方向へ逆転し、一路今日に至っている。その象徴的事例が、新保守主義・新自由主義ブッシュ・アメリカによるイラク侵略と小泉・安倍内閣による改憲強行の企みである。

昨今の内外情勢の進展を見るにつけ、あらためて思うのは、マルクス、エンゲルス、レーニンの理論的洞察力の基本的正しさ偉大さである。『資本論』、国家論、国家独占資本主義（現代資本主義）論、唯物史観すべて然りである。

一極に膨大な富が蓄積・集中しながら、対極には、すなわち本来は社会の主人公であるはずの労働大衆の側には、窮乏と無権利状態が、なぜ蔓延するのか―その理由は『資本論』によって解明できるし、また『資本論』によらなければ十全に正しい解明はできない。新自由主義という名の思想と政策が隆盛を極める現代の資本主義、構造的・発展段階的には国家独占資本主義に変わりなく、そしてここに諸悪の根源があることも、『金融危機』救済のための莫大な「公的資金」の投入と、企業貢献を媒介したいわゆる「政・官・財」複合の現実に端的に実証されている。

また、歴史とは基本的に階級闘争の歴史であり、階級闘争は歴史の機関車である。したがって、これが低迷すれば世の中は反動と後退が優勢となり、逆にこれが前進すれば、生活・権利の向上、平和と民主主義も前進するという真理も、唯物史観によって、とっくに論証済みである。

『社会通信』が一千号を迎えるという。『通信』と私の関わりは、前身の『旬刊進路』を含めて相当に長く、私なりに感慨深いものがある。極々零細な個人企業が、これほどの長い期間、全国に向けて通信を発し続けるということは、まさに偉業である。「言うは易く行うは難し」である。これまで『通信』が全国に残した知的財産は、計り知れないものがある。いずれもっと大きく花開く時がくるに違いない。

だが、現状を見ると、労働組合組織率の著しい低さと低下に示されているとおり、大部分の勤労大衆は、個々ばらばらの状態に置かれている。他方で、本質としてブルジョアの教宣機関ともいえるべき現代マスメディアは、巨大な装置を駆使して二四時間フル操業である。しかも、われわれの側には、まともな機関誌・紙は少なく、弱体である。この実情をみただけでも、「旬刊」紙が果たす役割の重要性は、いくら強調しても強調しすぎることはない。

みんなの協力とバック・アップで、これからも発行し続けられることを切望する。

(小林 晃・横浜市)

いま想うこと

凄い！一千号。格闘から生まれた労作「社会通信」。滝野さんの労を称え、共に喜び合いたいと思います。そして、これからの労働者階級の道のりに更に大きな石を投じてもらいたいと期待しています。

それにしても何ですが、労働者の団結の解け具合は。三〇年前には想像もできなかった階級の後退は。吉野弘という人が書いた、こんな詩の一節があります。

「何を作った」

労働者は何を作った。

資本家の頭を掠めたものなら

何でもさ。

やせて くだびれて 反抗して。

やせて くだびれて 協力して。

資本家は何を作った。

商品 商品 商品さ。

それから

資本家の頭には浮かばない

暗い労働者 人間のかけら。

労働者は何をつくる？

これからもずっと

資本家の思いつきに合わせて

自分を作ってゆく？

自分を壊してゆく？

この詩がつくられた一九六〇年代とは比較にならない程、鮮明に労働者の商品化は露骨になっています。労働者一人一人が資本に抗して、どう「自分を作ってゆく」かが突き付けられています。わたくしは電力労働者でした。電力職場では一九六〇年代から賃金体系の中に査定が導入され、競争賃金が押し付けられました。労働組合は急速に弱体化し、職場では自由にものが云えなくなりました。そして労使一体となって、原発推進体制がつくられました。昨今、そんな電力職場の行き詰まりの実態が浮き彫りになっています。原子炉のブレーキが働かず突然動き出し、一時は手に負えない実態が発生していました。そんな重大事故を「信頼を損なう」と上司の指示どおりに隠ぺいしてしまいました。原発に対する信頼性は落ちたのです。ことのおこりは、国交省に届いた匿名の告発文でした。一穴から大きな悪事が暴かれたのです。資本主義の正体、競争万能の実態が曝け出されたのです。

社会全体に自殺や凶悪犯罪の多発、非正規労働者の増大による身分や所得格差の拡大等々、資本主義社会の矛盾が、ぱっくり口を開けています。そして右寄りと見られている雑誌にまで、連合解体論が展開されるようになってます。先日喫茶店で手にした「文藝春秋」四月号に『負け犬労組』解体論―連合にもはや存在意義はない』が載っていました。労働貴族の労組支配の実態などが指摘されています。その善し悪しは別として、社会的にも労働者の団結力が問われはじめています。くすぶり続けている火種が再び燃えあがる発火点が、かすかに見えてきました。

憲法改悪の策動が表面化してきました。どう反撃するか。灰原茂雄さん、岩井章さんとの会話の一コマを想いおこしています。最後の岩井さんの言葉に耳を傾けてペンを置きます。

「思想的傾向や党派が違っていても、その党派の制約より人間性の方が優先するものと信じている。こう考えるから他党派の人々と信頼関係が作られ、友人としてつきあえるのである。これが原点となって統一が生まれるのである。」

憲法を活かす統一戦線が大きな試練の時を迎えています。

(濱崎 忠晃・島根県松江市)

◇ 読者からのおたより ◇

「全労協」の発展強化 改憲・弱者いじめ政策・制度改革等々、なんでもありの今日！政治が批判されて当然ですが、大衆の意識はどうでしょうか？ マスメディアを有効に活用した資本の戦略は成果を上げているのでは。同時に、対抗すべき労働界はたたかわない「連合」はもちろんのこと、「全労連」さんも資本のパートナーに変身したかのような活動家を見るにつけ、背筋が寒くなる現場の実態があります。「全労協」の発展強化しか労働運動の再建はありえないのではと、最近ひしひしと感じます。残金カンパです。

(広島・A)

編集部より 総資本は民間政治臨調、「二世紀臨調をつうじマスメディアを取り込みました。各種審議会、委員会に参加させ、異見を封じるとの仕組みがつくられたのです。大元は国鉄分割民営化を図った中曽根の第二臨調です。さらにその大元は第二次世界大戦前の「昭和研究会」です。彼らは歴史を受け継いでいるんです。労組が再編されたのはこの過程の一齣です。

一千号発行記念のカンパ 滝野さん一千号おめでとございます。発行時より「社会通信」にお世話になっていきます。一千号ふりかえり今後の展望を語りながら、充電してください。(神戸・M) 編集部より 多額のカンパありがとうございます。私からの贈り物もお楽しみいただけただけでしようか。

カンパです 端数はカンパです。

(さいたま市・S)

編集部より 感謝です。さらにがんばります。一千一号からもご支援を。さらに発展を 労働運動の原点を堅持したたがいの紹介など、教えを乞うところ大です。更なる発展を祈念します。(大阪市・O)

編集部より 労働運動の現状は生産性向上運動に巻き込まれたこと。したがって、「生産性三原則」、「生産性基準原理」、生産性向上運動と労働者との関係を勉強し、方向を見定めることが緊要な課題です。

若い力に期待 大野(大分県) 地域初の組織内県議、玉田輝義(四十四歳)が誕生しました。若い力に期待しています。

(K・S)

編集部より 赤峰氏が今号に書いてくれています。新しい芽・力の成長！ 嬉しい！

偽善者に格差を語る資格はない 「格差社会」という言葉を誰もが使い「格差のない平等な社会を」と偽善者を気取る者たち(政治家・評論家・マスコミ・労働組合etc)は、沢山います。し

かし、私たちの前（テレビ・新聞）でそれを語る「優しい人々」のほとんど総ては、〃格差の頂点〃に君臨しており、その自分の姿を当たり前だと思っています。従って言葉の万分の一も行動で示すことはありません。彼らのなかには、早朝から深夜までニュースにドキュメンタリーにバラエティと番組を掛け持つ忙しさをひけらかし優越感に浸っている者もいます。その彼らは、人々の惨劇や不幸の根幹をすつ飛ばして声高に報道し、思いつきで論じて、瞬時に次の不幸に移り変わります。国民の多くは、深く考えることをやめ、視覚と聴覚のみで軽く聞き流す〃クセ〃をいつの間にか身に着けて（着けさせられた）しまいました。（金太郎）

編集部より ソノ通りです。立ち止まって考えること、本物と偽物をかぎわける能力をつくり、高めることが必要です。

闘争基金箱 先日送りました「闘争基金箱」が無事滝野さんへ届いたとのこと、よかった、ほっとしています。「闘争基金箱」は私―反マル生、安保・沖繩、反合理化、われ元国労 強く誇り持つ―のまさに分身です。今日、今までもそうですが「闘争基金箱」を大分かかって作り、送る段になると、「別れが悲しくなるという辛い気持ち」になります。今回のように、「三十年の歩みを重ねてきた『社会通信』『社会通信一千号』への御労苦、御奮闘に対し、読者、全国の闘う仲間の皆さんに深く感謝しつつ、「闘争募金箱」を作ったわけですから：可愛い子には旅をさせよ！という言葉もあります。必ずや滝野さんはじめ皆さんに大事にされ役に立つ（活用される）ことを切に願っています。（札幌・松里福慈）

編集部より 「闘争基金箱」には「社会通信」と大書され、「祝『社会通信』創刊三十周年（一九七七年十一月〇七年十一月）を心からお祝いします。重ねて：ありがとうございます」と記されています。子供を愛でるようにつくられたことがよくわかりました。松里さん、ありがとうございます。すでにいくらかのコインが投入されました。

佐高信さんが語る 「人は平和でなければ生きていけない。障がい者福祉は平和でなければ向上しない」をキーワードに活動している二つの障がい者団体が、今後、この国がどこに向かうのか？庶民や障がい者の暮らしはどうなるのか？ 経済評論家の佐高さんが語ります。ぜひご出席を。（障がい者情報ネット）

編集部より 日時は六月二日（土）、午後一時三十分から午後四時。場所は横浜「波止場会館」、資料費一千元です。

熊沢誠さんのコメント 熊沢誠さんの失業の増加に合わせるように自殺者が増えていることについてのコメントに再び目を通しました。三年連続三万人を越え四〇〇五〇歳代の自殺者が目立っていますがなぜでしょうか―激しいサバイバル競争を強制され、能力主義の選別を受け、すべてを自分の責任と思ひ込んでしまうからです。大企業の労組でさえ発言権を失い個人の才覚で苦難を乗り越えるしかない労働者が肌で感じるようになっていっています。背景に何があるのでしょうか―日本の企業社会ではこの四半世紀で二つのことが醸成されてきました。一つは、企業の発展があつて初めて労働者の生活が可能になるという考え。もう一つは、能力主義による選別は仕方がないというあきらめ、この二つが経済のグローバル化の中ですべての規範になるうとしていっています。仲間が助け合つて平等な社会をつくつていこうという本当の意味での豊かさが置き去りにされています。リストラの一方向で企業間の競争が激化していますが―人が減る一方で、一人当たりの仕事量は増えています。サービス残業が当たり前になっている。競争に付いてこれない人には排出圧力を高める。仕事をさせずに窓のない部屋に押し込めるなど陰湿ないじめが横行しています。（大阪・K）

◇ 編集部だより ◇

▽一千号に多くの想ひ、寄せていただいています。編集子には嬉しい、感激の一言です。連日、メール、FAX、郵便で「おめでとう、さらに頑張つて、カンパ」と激励を寄せていただいています。▽〆切、五月五日としました。四月三十日で滝野の稿を含め二十名、到着順で一千号つくりました。一千号にと寄稿された方にはご免なさい。次号、一千一号掲載となった皆さん、こんな理由で申しわけありません。

▽すでに編集部だよりでお伝えしているのですが、六月より月二回（一日・十五日）の発行にさせていただきます。理由は大状況から「息長く」続けるには「最良の選択肢」との想ひです。